※A3版に拡大してお使いください。

2	
視　写	言葉の力をつけよう（新聞コラムの視写②） 佐賀新聞　有明抄「窓の外」
名　前	

やってみよう

「有明抄」

新聞の第一面にあるコラム記事は字数が限られているため、段落を改める箇所を各社の決まりを設けて表記してあります。「佐賀新聞」の「有明抄」では段落を改める箇所では、句点「。」と改行をまとめて◆で示してあります。「有明抄」の◆部分は原稿用紙の書き方に従って、句点「。」を付け、改行して視写しましょう。

短編小説の名手、注オー・ヘンリーの『最後の一葉』。病気で生きる希望を失った若い女性が一人。窓の外には冷たい風に吹かれるツタの葉五枚◆その葉が散ってしまった時、自分の命も尽きるのだ―と思いこんでいる。一枚、また一枚。嵐が来て最後の一枚もついに…。そっと窓を開けると一枚の葉がしっかり残っているではないか。彼女はそれを見て生きる希望を得るのだが、実はそれは彼女を元気づけようと誰かがレンガ塀に描いた絵だった◆この話と似ているようで少し違う『窓の外』という物語がある。余命いくばくもない人たちがベッドを並べる病室。死の恐怖におびえ、会話もない。ある日、窓際のベッドに横たわるヤコブさんが独り言のように窓の外の様子を話し出す。「かわいい男の子が子犬を連れて散歩している」「道端に黄色い花が…」◆いつしか「ヤコブさん、窓の外の様子を教えて」と部屋の人たちから声が。ヤコブさんは喜んで聞かせてやる。ところが、そのうち誰かが「自分も窓の外を見たい」と言い出した。しかしヤコブさんはベッドを代わろうとしない。「なんてわがままな人だ」と、みんなが怒りだし、また元の暗い病室に◆しばらくしてヤコブさんが死んだ時、ベッドに近づいて窓の外を見ると、そこには壁があるだけ。ヤコブさんは本当は何も見えないのに、みんなに希望を与えようと楽しい作り話を聞かせていたのだ。ヤコブさんの優しさに泣き崩れてしまう―という話◆人の心の中は目には見えない。でも、見えないものを見ること、これが大切だ。親と子、友達同士、先生と生徒、上司と部下。いろんな人間関係がある。ひょっとしたらヤコブさんのような人がいっぱいいるかもしれない。

佐賀新聞　平成十八年十二月九日付　一面

注　オー・ヘンリー…（一八六二～一九一〇）アメリカの短編作家。「賢者の贈り物」など

720字　600字　400字　200字